

卷六「授刀寮散禁歌群」考

——聖武朝春日讃歌としての読み——

一

四年丁卯の春正月、諸の王、諸の臣子等に勅して、授刀寮に散禁せしむる時に作る歌一首 并せて短歌
 ま葛延ふ 春日の山は うちなびく 春さり行くと 山峽
 に霞たなびき 高田に うぐひす鳴きぬ もののふの
 八十伴の男は 雁がねの 来継ぐこのころ かく継ぎて
 常にあるせば 友並めて 遊ばむものを 馬並めて 行か
 まし里を 待ちかてに 我がせし春を かけまくも あや
 に恐く 言はまくも ゆゆしくあらむと あらかじめ
 ねて知りせば 千鳥鳴く その佐保川に 岩に生ふる 菅
 の根取りて しのみ草 祓へてましを 行く水に みそぎ
 てましを 大君の 命恐み ももしきの 大宮人の 玉梓
 の 道にも出でず 恋ふるこのころ (⑨四八)

反歌一首

梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もどろ
 に (⑨四九)

古館綾子

右、神亀四年正月に、数の王子と諸の臣子等と、春日野に集ひて打毬の樂をなす。その日忽ち天陰り雨ふり雷電す。この時に、宮の中に侍従と侍衛となし。勅して刑罰に行ひ、皆授刀寮に散禁せしめ、妄りて道路に出づることを得ざらしむ。ここに悵憤みし、即ちこの歌を作る。作者未詳なり。

神亀四年正月、聖武天皇の宮は不意の雷におそわれる。その折、天皇を護衛する「侍従と侍衛」は宮を離れていた罪で授刀寮に散禁された。その時に作られたのがこの歌群であると、題詞左注は語る。ちなみに、この事件は『続日本紀』をはじめとした史料には記されていない。

さて、当歌群が収められる巻六は、巻頭歌（九〇七番歌）から九四九番歌まで、長歌・反歌を組み合わせた歌群を続けて載せており、その最後に当たるのが当歌群（以下便宜上「授刀寮散禁歌群」と呼ぶ）である。巻頭歌群から順に見ていくと、養老七年の吉野行幸、神亀元年の紀伊国行幸、神亀二年の吉野行幸、難波行幸、神亀三年の印南野行幸と、「行幸」の題詞を持つ歌群が並べられ、引き続き、「辛荷の島に過ぎる」「敏馬の浦

に過ぎる」と、「一過ぎる」の題詞を持つ歌群が載せられている。人麻呂の近江荒都歌に顕著なように、「一過ぎる」の題詞は現在の宮廷にとって重要な意味を持つ場所を通る際、わざわざ立ち寄って歌を詠んだことを表すものと考えられる。

このような題詞を持つ歌群に続き、同じ長歌・反歌の組み合わせで収められているところを見ると、当歌群もまた聖武朝で作られあげた天皇周辺の歌として重要な意味を担っていたと推測できる。このことは、題詞左注に「勅」、歌の中に「大君の命恐み」「宮」という言葉を含み、「諸王諸臣等」「諸臣子等」「数王子諸臣子」「侍従侍衛」「八十伴男」「大宮人」といった天皇側近の集団を表す表現が多用されることから明らかである。

しかし、当歌群を天皇周辺の歌として捉えようとするとき、そこに二つの疑問が生じる。一つは、天皇護衛の側近が任務を怠たるといふ、宮廷にとって不名誉な事件がわざわざ描かれること。もう一つは、散禁された者達がその罪に対して反省の念を抱くでもなく、春日野の春景に惹かれ続ける様が詠まれることである。要するに、宮廷が持つ超越的要素の顯示こそがその最たる目的ともいえる天皇周辺の歌の中に、天皇や宮廷の存在を否定する要素が含まれているようにも読めるのだ。こうした、一見矛盾ともいえる歌の姿はいったい何に由来するのか。本論では、この矛盾を矛盾とせずに受け入れるところから当歌群の読みを進めていきたいと思う。

二

授刀寮散禁歌群の題詞・左注・歌には、「諸王諸臣等」「諸臣子等」「数王子諸臣子」「侍従侍衛」「八十伴の男」「大宮人」など、天皇を取り巻く集団が繰り返して現れる。これらはいずれも散禁された者達を指すと見られるが、彼らと授刀寮との関係が明確ではない。題詞・左注を見る限り、「授刀寮」は散禁された場所を示すにとどまり、天皇を護衛できなかった天皇側近集団が授刀寮の役人によって散禁されたと読める。しかし、実は授刀寮そのものも、帯刀して天皇の身辺を守る舍人を司る役所であったため、散禁された「諸王諸臣」そのものが、授刀寮に所属する官人達であった可能性も高い。

雷から天皇を守る役職といえ、平安時代の「雷鳴の陣」がある。『枕草子』にも用例が見られ、雷鳴の激しい折に清凉殿・紫宸殿に近衛・兵衛の大・中・少将が弓矢を持って警護に当たったものとされる。

ここで注目すべきは、「雷鳴の陣」への参与が認められる近衛府の源流の一つに授刀寮があることだ。授刀寮はこの後、中衛府に改編されたと見られ、一度史料から姿を消すが、天平十八年二月に騎舍人を改めるといふかたちで再び設置される。この第二次授刀舍人は、聖武天皇の死後、天平宝字三年十二月に授刀衛として編成され、さらに天平神護元年二月には近衛府へと発展していく。近衛府と授刀寮の間にこうした関係が見られることから、当歌群で散禁された側近集団そのものが授刀寮の

役人達であると見ることもできる。

授刀寮がはじめて設置されたのは、慶雲四年、元明即位直後のことであり、その背景には当時皇位継承候補とされていた首皇子（後の聖武天皇）の地位擁護という目的があったようだ。また、新田部親王の「知五衛及授刀舎人事」任命や、授刀寮長官（頭）が藤原房前であったことも、授刀寮が聖武の宮廷にとつていかに重要なものであったかを物語っている。その授刀寮の役人が遊びに興じ、雷から天皇を護衛する職務を怠ったというのだからおだやかではない。

天皇側近と雷の關係を示唆する有名な話に、『日本靈異記』冒頭の「雷を捉える縁」がある。「雄略天皇の隨身にして、肺脯の侍者」であつた小子部栖輕が、ある時、天皇と皇后が同衾しているのを知らずに大安殿に参入する。天皇は恥じて行爲を中断するが、まさにその時、雷が鳴った。そこで天皇は栖輕に「汝鳴神を請けたまつらむや」と尋ね、栖輕はその要請によつて諸越の衛で雷神と対面する。「天の鳴電神、天皇請け呼びたまつる云々」「雷神といへども、何のゆゑにか天皇の請けまつるを聞かざらむ」と叫んだところ雷神が落ちたため、神官を呼び寄せてそれを輿に入れ宮中に持ち帰る。雷神を見た天皇は「見て恐りたまひ、偉しく幣帛を進りて、落ちし処に返さしめ、今でもそこを雷丘と呼んでいる、という話である」。

本文では「天皇、后と大安殿に寝て婚合したまへる時に、栖輕、知らずして参入りき。天皇恥ぢて輟みぬ。時に当りて、空に雷鳴りき」とあり、栖輕が大安殿に参入した直後に雷が鳴つたと読めるが、先に見た「雷鳴の陣」の体制を考えれば、落

雷の瞬間天皇の側に居合わせる栖輕の姿は、雷鳴を聞きつけて真つ先に馳せ参じる選ばれし側近のありかたを別の角度から捉えたものといえるだろう。

さて、この話には天皇の命を受けた栖輕が、天皇に由来する特殊な力によつて雷を捉えるという構図が見られる。間接的にはあるが雷神を凌ぐ天皇の力が示されているといえる。しかし、栖輕が持ち帰つた雷神に畏れおののき丁重に祭る天皇の姿からは、雷神と天皇との微妙な力關係もうかがえる。天皇が栖輕に尋ねたことばにあらわれる「請」は、靈異記では僧や仏を迎える場合に用いられ、ここでも雷が神として待遇されていることが示されているといふ。

また、『日本書紀』や『続日本紀』の「雷」の例を眺めていくと、「雷」を含めた異常氣象が多く見られる時代として、皇極紀が浮上する。皇極紀は、その原因を「夏令を行ふ（元年十月）」「冬令を行へばなり（二年二月・三月）」とする。これは『礼記』月令に「孟冬：夏令ヲ行へば則チ国ニ暴風多ク、方冬寒カラズ、蟄虫復タ出ツ」とあることによるもので、雷を含めた天の異変が季節に合わない制令、つまり政治の不備によつてもたらされたものとするのである。一方で、皇極紀には天候を操る天皇の姿も描かれる。

八月の甲申の朔に、天皇、南淵の河上に幸して、跪きて四方を拝み、天を仰ぎて祈りたまふ。即ち雷なりて大雨ふる。遂に雨ふること五日、天下を薄く潤す。或本に云はく、五日連雨して九穀登熟れりといふ。是に、天下の百姓、俱に万歳と称し曰さく、「至徳します天皇なり」とま

をす。

(皇極紀元年八月)

蘇我入鹿の雨乞いの失敗との対比によって、皇極の、天皇としての制御力が印象づけられる。雷を見事に操って恵みの雨をもたらすその姿に、天皇の「至徳」の現れを見るのだ。これら二つの記事は表裏の關係にある。皇極天皇即位後に異常氣象や地震などの天変地異が相次いだという記事を仮に事実とすれば、だからこそそれを補完する話(その雷神を制御する天皇像)が必要だったのだらう。このように、天皇と雷が対面する際、そこに生じる力關係に最大の注意が払われたであらうことは想像に難くない。

授刀寮散歌群が詠まれた聖武朝にも、異常氣象に関する記事は多い。すでに述べた通り、当歌群の題詞・左注が示す内容そのものは史書にはあらわれないが、神龜四年正月の条に「朝を廃む。雨ふればなり。」二月丙辰にも「夜、雷なり、雨ふり、大風ふく。」と異常氣象が続いている。このような状況を受け、二月辛酉には「金剛般若經を転読せしむ、災異を銷さむが為なり。」とあり、同じ二月甲子には次の勅が出されている。

此者、咎徵荐に臻りて災氣止まず。如聞らく、「時の政違ひ乖きて、民の情愁へ怨めり。天地譴を告げて鬼神異を見す」ときく。朕、徳を施すこと明らかならず、仍、懈り缺くること有るか。將、百寮の官人、奉公を勤めぬか。身、九重を隔てて、多くは詳らかに委しくせず……

最近、災害が続けて現れるのは、天皇である自分が「徳を施すこと明らか」でないためか、あるいは臣下が「奉公を勤め」ていないためか。原因を臣下と二分するよ々な物言いだが、

「時の政違ひ乖きて、民の情愁へ怨めり。天地譴を告げて鬼神異を見す」との引用からは、自らの政治の不備を「災氣」の原因として認める態度が明らかである。

また「天地」は、天皇の政治の不備に対し天帝の怒りが「鬼神」によって異常氣象としてもたらされるという天命思想に基づくものであり、これら異常氣象による災は、天皇に直接害をなすきわめて危険なものとして認識されたことだらう。いずれにせよ、この時期、度重なる異常氣象に備えた天皇の護衛が特に重視されていたことは間違いない。

そして、この護衛の対象は天皇だけには限らなかった。先に触れた金剛般若經転読の意味合いについて、新川登龜男氏は次のように述べている。

この月日は、光明子の懷妊期に微妙に近い。従って、その懷妊と出産と立太子とを成就させるために、よってくる災異を払いのけようとしたもののなのだらうか。

この転読には、度重なる災異から皇太子として生まれる皇子を守る意味も含まれていたのではないかというのである。この皇子について、靈異記に興味深い話が載る。

神龜四年の歳の丁卯に次る九月中に、聖武天皇、群臣と添の上の郡の山村の山に獵したまひき。鹿ありて、細見の里の百姓の家の中に走り入りき。家人知らずして、殺して噉ひつ。後に天皇聞しめして、使を遣はしてその人どもを捕へしめたまふ。…(中略)…すでにして、使ひに従ひて参る向ひぬ。授刀寮に禁む。すなはち、皇子の誕生れませるによりて、時に朝廷に大きに賀き、天の下に大赦す。刑罰

を加へずして、反りて官祿を衆人に賜ふ。歡喜比なかりき。
(第三十二 新全集本による)

神亀四年は、まさに授刀寮散禁歌群の題詞に見られるその年である。聖武天皇が郊外で獵をしてゐるのを知らずに、その獲物の鹿を殺して食べた農民が罰せられ、授刀寮に監禁される。皇太子・授刀寮・そして、天皇に関わる罪と、授刀寮散禁歌群の題詞・左注や、続日本紀の記事に示される状況に通じるものがここにも見られるといえる。

神亀四年は皇子誕生の年であり、この時期に皇子についての言及が多いのは当然だ。しかしこの皇子が、誕生から一年後の九月十三日に病によつてこの世を去ることを思えば、不遇の皇子に纏わる言説が事後的に生みだされた可能性も考えられる。「礼記」月令には、雷と子供誕生の關係について次のようにある。

是の月や、日夜分し。雷乃ち聲を發し、始めて電す。蟄蟲咸動き、戸を啓きて始めて出づ。雷に先つこと三日、木鐸を奮ひて以て兆民に令して曰く、雷將に聲を發せんとす。其の容止を戒めざる者あらば、生子備はらず、必ず凶災有り、と。
(新釈漢文大系本による)

ここで、「是の月」とは二月を表す。この時期には雷が鳴り始め、雷光がひらめくから、謹んで神の怒りに触れないようにしなければならぬ。もし、それを守らなければ、生まれてくる子どもは不具となり、ひどい災いにも出くわす、というのだ。「雷」と「不具の子」の關係は、そのまま神亀四年の状況——災異の多発と皇子の誕生——に向き合いかねないものである。

このように、神亀四年に轟く雷は、天皇のみならず皇子にとつても不吉な現象であつた。そうした時期に、授刀寮散禁歌群が示すような事件が実在したとすれば、宮廷にとつてこれほど不名誉かつ危険なことはない。先の勅より一ヶ月後に出された三月二十二日の勅にも、「衛府の人等は日夜闕庭に宿衛して、輒くその府を離れて他処に散ち使ふこと得ざれ」とあり、側近集團の護衛に関する関心の高さがうかがえる。

こうした状況に対し、授刀寮散禁歌群の歌に詠まれるのは、散禁され「妄りて道路に出づることを得ざらしむ」ことに対する「悵憤」の思いであるという。なぜ、この時期にこのような歌群が必要とされたのだろうか。その謎を解き明かす鍵は当歌群の歌の表現にあるようだ。以下、一度題詞・左注を離れ、歌の表現を追つていきたいと思う。

三

まず長歌であるが、その内容は大きく三つに分けられる。はじめに、春の春日山や高円に出かけるのを楽しみにするという内容、次に、このような事態になる前に左保川で禊ぎ祓えをしておけば良かったという内容。そして最後に、大君の命令を畏れ多く思い、外に出ることがままならないために恋の思いを抱かされるという内容である。歌の内部には詠み手を含む集團の行為を「罪」として捉える表現は見られない。かううじて禊ぎ祓えの部分にその要素を見ることができそうだが、それも難しい。なぜなら、「あらかじめ」や「(かねて)知りせば」といっ

た表現は、思わぬ恋の展開や人の死に対して多く使われる表現で、こちら側には予測不可能な事態が起こってしまったことを示すと考えられるからだ。つまり、ここで覗き祓えをしておくのだったという後悔を導き出すことからは、予測して避けられるような出来事ではなく、不意に巻き込まれてしまう類のものであったと考えられるのである。

しかし、罪や罪に対する反省が詠まれないからといって、この歌が刑罰に対する不満を述べていると捉えることも性急にすぎない。なぜなら、歌は刑罰のことに一切触れず、春の到来を心待ちにする春景への「恋」を描くだけだからである。実は、先程触れた覗き祓えも、「恋」との関連が深い語である。たとえば、次のような歌がある。

君により言の繁きを古郷の明日香の河にみそぎしに行く

(④六二六)

恋のうわさがうるさいために覗きをしようというものだ。一般に授刀寮散禁歌群の「覗き祓え」は、雷に逢ったこと、その際に宮中に控えていなかったこと、その結果授刀寮に散禁される事態を招いたことなどに対し、事前にとるべきであった対処法と解されている。しかし、題詞・左注をはずし歌の内容だけを追えば、この「覗き祓え」も今抱えてしまった春景への「恋」のわずらわしさを取り除くためのものと読むほうが自然なのではないか。また、先ほど触れた「かねて」知りせば」の用例にも、

かく恋ひむものと知りせば夕置きて朝は消ぬる露にあらましを
(巻十二・三〇三八)

かく恋ひむものと知りせば我妹子に言問はましを今し悔しも
(巻十二・三一四三)

かくばかり恋ひむとかねて知らませば妹をば見ずぞあるべくありける
(巻十五・三七三九)

など、恋心を抱えてしまった段階から遡って、自らの行動を悔やむ歌が見られる。

さらに、「恋」の要素は長歌だけでなく反歌からもうかがえる。反歌は「佐保の内に遊びし」の主体を散禁されている者とするかそれ以外の宮廷の人々とするかでおよそ二通りに解釈されており、ほとんどは前者の意味でとられている。後者の読みが出されるのは、長歌に「春日野・高円」が詠まれ、左注にも春日野で遊んだとあるのに対し、反歌では「佐保の内」で遊んだと詠まれることによる矛盾を解消するためであろう。その読みに従えば、散禁された者達を後目に他の人々が遊びに行き、その体験をこれ見よがしに言い回るという流れになり、なるほど矛盾は解決するように見える。

しかし、題詞・左注をはずして考えれば、前提である矛盾そのものが存在しないことに気づく。長歌には「春日・高円」に行つたとは詠まれていないのだ。佐保川で覗き祓えをしておけばよかったとあることからすれば、むしろすでに出かけたのは「佐保」の地であり、「佐保の内」で遊んだという反歌にも合致する。あのとき佐保の内の佐保川で覗き祓えをしておいたなら、春日野の春景に恋焦がれる思いを抱かずにすんだのに、と長歌は詠んでいるのであり、「遊びし」の主体が散禁された人々であることにも特に矛盾は生じないのだ。

さて、ここで注目したいのが、反歌の結び、「宮もとどろに」である。こもも従来、宮廷全体が散禁者達の失態のうわきでもちきりとなる意味に取られることがほとんどだが、繰り返し述べてきたように、長歌反歌どちらにも彼らの罪や罰は詠まれている。歌の解釈だけで考えれば「散禁者の失態」は前提にできないのである。では、何が「宮もとどろに」なのだろうか。「とどろに」はどうとうと鳴り響く音を表した擬音語といわれ、万葉集の用例では滝の落ちる音や波の音を表すものが多く、その音が人の声高なうわきの喩となっているものが目立つ。

伊勢の海の磯もとどろに寄する波恐き人に恋ひ渡るかも

(四六〇〇)

いくばくも降らぬ雨故我が背子がみ名のここたく滝もとどろに

(二八四〇)

葛飾の真間の手児奈がありしかば真間のおすひに波もとどろに

(三三八五)

左夫流児が斎きし殿に鈴掛けぬ駅馬下れり里もとどろに

(四四一一〇)

たとえば六〇〇番歌は人々にそのすばらしさをしきりと讃えられる、畏れ多い相手への恋が詠まれている。三三八五番歌も手児奈の美貌がもてはやされる意であらう。そして、良きにつけ悪しきにつけ人々の注目を集める人物との恋は、格好のうわきの対象ともなる。二八四〇・四一一〇番歌では、相手の評判にとどまらず、二人の関係に関する評判が立ち、特に四一一〇ではそのうわきが里を駆けめぐる様が詠まれている。

このように「とどろに」は、恋に執拗にまわりつく人々のうわきの激しさを表す表現として多く用いられていたことが分かる。すると、授刀寮散禁歌群反歌に見られる「とどろに」もまた、散禁者達の恋を喧伝するものとして捉えることができるのではないか。では、彼らの「恋」とは何か。それは、梅や柳の見頃が過ぎるのを惜しむ心である。長歌で描かれる春日野と同じく、彼らは佐保の内の自然や景観に心惹かれ遊びに出た。春景と、春景に恋い焦がれ遊びに出かけた彼らの関係が、ついに逢瀬を遂げた男女のそれに重ねられる。

また、「宮もとどろに」は、『皇太神宮儀式帳』六月例の直會御歌にも見られることばであり、場全体が晴れやかな宴の空間と化している状態を次のように表している。

然從其瀧祭之地、於大神宮奈保良比所爾參入來、以同日夜、御食奈保良比、禰宜、大内人、并諸物忌、内人等、及物忌父母等、戸人男女等、皆悉參集侍。然即奈保良比御歌奉。其歌波、佐古久志侶、伊須々宮仁、御氣立豆、宇都奈留比佐婆、宮毛止々侶爾。其歌波、毛々志貴乃、意保美也人乃、多乃志美止、宇都奈留比佐婆、美也毛止々侶爾、也。供奉御舞、自禰宜始、内人物忌父等。

授刀寮散禁歌群でも、梅や柳の良い時期が過ぎるのを惜しみ、遊びに出かけた風流な「八十伴の男」「大宮人」達がうわきの中心となることで、宮廷全体が晴れがましい雰囲気包まれていることを表しているのではないか。

こうして歌の表現を追ってみると、その中心は良い季節を迎えた土地への恋であり、題詞・左注の内容とはずいぶん趣が異

なることが分かる。題詞・左注と歌の間にあるこうした方向性の違いを確認した上で、もう一度歌群全体（題詞・歌・左注を合わせたかたち）を眺め、当歌群の聖武周辺歌としての意味を改めて考えてみたいと思う。

四

当歌群全体を考える際、最も重要なのは、歌の中の「恋」が「八十伴の男」「大宮人」といった「天皇側近の集団」のものとして描かれているという点である。春日の春景に恋の心を抱くのは、「常にありせば友並めて遊」ふはずの「八十伴の男」という集団であり、また、「大君の命恐」む「大宮人」たちである。公的な任務に対し、私的な思いが描かれるようにも見える当歌群だが、ここでの「恋」が集団性に支えられたものであることを見逃してはならない。そして題詞・左注に目を向ければ、こちらにも「諸王」「諸臣子」「数王子」「侍従」「侍衛」、そして「授刀寮」と、天皇周辺に位置する集団の名が羅列されていることに気づく。この点では、題詞・歌・左注は一貫しているのである。

これら集団を表す語は、互いに当歌群の持つ集団性を強調するとともに、歌の中にあらわれる「八十伴の男」「大宮人」が、題詞・左注の「諸王」「諸臣子」「数王子」「侍従」「侍衛」「授刀寮」によってその内実を補足説明されるという関係にある。では、そこで補足される「八十伴の男」「大宮人」像とはいったいどのようなものか。それは、天皇に最も近いところに位置

し、天皇の命に関わる重要な任務を任された集団としての姿である。題詞・左注が語る「雷」や「授刀寮」という要素は、彼らが天皇——しかも、天皇一般ではなく聖武天皇——に最も近い集団であることを示すために必要とされたのだ。なぜなら、小子部栖軽の例に顕著なように、雷から天皇を護衛する義務を負う者は同時に天皇に最も近づく権利を有するからである。さらに、授刀寮はその発足時から聖武と深い関わりを持つ機関でもあった。歌の中に彼らを組み込むことは、他のどの天皇でもない、まさに聖武天皇の宮廷を構成する側近像描写の方法だったのである。

授刀寮散禁歌群が天皇周辺歌としての意味を持つのも、そうした資格を持つ集団が春日に恋をすることを詠んだからだ。選ばれた集団の恋の対象となることにより、春日はすばらしい土地として讃えられる。そしてこの「春日」の地もまた、聖武ゆかりの地であった。藤原不比等の娘である宮子から生まれ、同じく不比等の娘である光明子を后にする聖武にとって、藤原氏の氏社のある春日の地が特別な意味合いを持っていたことはまちがいない。当歌群が含まれる巻六に行幸時の作歌が数多く載せられていることについては既に触れたが、藤原氏出身の母を持つという出自の問題を抱える聖武にとって、これらの行幸は自らの天皇たる根拠を強固に作り上げる過程の一つだったと考えられる。春日讃歌としての授刀寮散禁歌群、当歌群もまた、聖武朝という新しい天皇の時代を体現する重要な歌として、巻六にその姿をとどめているのではないだろうか。

不意の雷や散禁の罪など、宮廷にとって不都合な内容を含む

ようにも見える授刀寮散禁歌群。しかし、むしろそれらの要素によって、歌中の「八十伴の男」「大宮人」らは他でもない聖武天皇の側近として立ち現れていた。そしてその集団の恋焦がれる地として聖武ゆかりの春日を描く当歌群は、まさに聖武朝が必要とした一回的な春日讃歌であったといえよう。

授刀寮散禁歌群には、後期万葉における大伴家持の歌との近似が見られ、その制作年次を疑う向きもある。だが、その制作年次にかかわらず、当歌群が聖武朝の神亀四年という場と分かち難く結びついていることは確かであり、家持歌との検討もこうした理解の上になされる必要があると思われる。⁽¹⁵⁾

注(1) 岡部隆志「『過』きる人麻呂―作家論への試み」『セミ

ナー古代文学』八八―一九八九) など。

(2) たとえば、武田祐吉『萬葉集全註釋』の「大騒ぎになつて遊ばれないのを恨めしうに詠んでいる」や、窪田空穂『万葉集評釈』の「當時の官人の、職責に對する覺悟の足りなかつたことを明らかに示してゐるものである」といった解釈に見られる。それに対し、伊藤博『萬葉集釋注』は、「悵憤の情を主題にし、それ自体を歌詠にして楽しんでゐるようなところがある。長歌は閉じこめられた人びとを第三者が擲擲する姿勢をとり、反歌は第三者のその擲擲に当の人びとが反撥した形をとつてゐると読める。」と、歌の表現と詠み手の関わりについて触れている。また、古橋信孝『「万葉集」の郊外』(『和文学の成立 奈良平安初期文学史論』若草書房 一九九八) は、当歌のような事態が起こる背景に、国家組織の確立により、天皇とは独立し

て行動しうる貴族社会の成立を見る。

(3) 『枕草子』(新全集本) 二七七段、「神のいたう鳴るをりに」に「神なりの陣こそいみじうおそろしけれ。左右の大將、中少將などの、御格子のもとに候ひたまふ、いとはし。」とある。

(4) 雷鳴の陣については『北山抄』の「解雷鳴陣事」に詳しい。

(5) 笹山晴生「授刀寮舍人補考」(『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会 一九八五)。また、直木孝次郎氏は「古代天皇の私兵兵力について」(『史林』四五卷三号 一九六二)の中で、『続日本紀』の配記が「大舍人」「授刀舍人(帶剣舍人)」「兵衛」の順になっているところから、授刀寮は令外の軍事機関として、天皇の私兵的色彩を強く帯びたもので、五衛府以上に天皇側近に随従していた可能性があったことを指摘する。

(6) 「肺肺の侍者」は肺や肝(肺)のような、なくてはならない腹心の侍者を指す。輕が天皇の側近とし重要な位置を占めていたことを示すものである。

(7) このあとに後日譚が続くが今は割愛する。また、この話のほとんど同内容が雄略紀七年七月の条にも見える。

(8) 『古典集成』の頭注に「本書の「請」は、神や仏をお迎えする場合に用いるので、本説話の前段では、雷は僧仏なみに神として待遇されている」とある。

(9) 辰巳正明「天人感応の詩学」(『万葉集と比較詩学』おうふう 一九九七) に詳しい。

(10) アジアブックス「道教をめぐる攻防」(大修館書店 一九九九)。

(11) 「古義」に、「さて今の正月のことは、統紀には見えざれども、右の制をそむきて、宮中を明て他處に出遊せしによりて三月に此勅ありけるならむ」と、当歌群とこの勅が直接に關係していたことを指摘する部分が見られる。

(12) 都の東側に位置する春日野を基準にすると、その南が高田の野、北側が佐保となり、確かにこの三カ所を重ねて考へることは難しい。高田の地には聖武の離宮があったことが巻二十・四五〇六番歌の題詞からうかがえる。古橋信孝「四季歌の成立」(『古代都市の文芸生活』大修館書店 一九九四)によれば、これらの場所は全て、当時の都に対する郊外であり、人々が季節を感じる場所として存在していたものである。このような観点からこの三カ所のつながりを解くことが可能かもしれない。

(13) 『萬葉集全注』巻第六(吉井巖)は「左注によれば、散禁されている人々が赴いたのは、今の奈良市東方の春日野であつて、佐保とはあきらかに場所が違ふ。この「遊びし」人は、他の大宮人たちであらう」とする。

(14) 窪田空穂『万葉集評釈』は、この反歌が事実を枉げ、春日野に遊んだことを風流な遊びとして言いなすことで罪を小さくし、そのような小さな罪に対する「宮もとどろに」という結果が不釣り合いであることを言つたものとする。噂の内容についてはっきりと言及する註釈は見られないが、おおむねその文脈から春日野に遊んだことに對する非難として捉えられていることが了解されるものである。

(15) 猪股ときわ「宮廷歌人―天皇の宮廷・歌の宮廷」(『古代文学講座 8 万葉集』勉誠社 一九九四)。

(16) 家持歌との關係については、森朝男氏(『恋と禁忌の古

付記

代文芸史」など)が指摘する自然に對する恋という要素において興味深い共通点が多い。今後さらに考察を進め、両者の關係についても言及できればと思う。

本稿は、平成十四年八月二十一日の古代文学会夏季セミナーにおける口頭発表をもとにしている。席上、諸氏より貴重なご教示を賜つた。ここに深謝申し上げる。